

保護者からみた知的障害のある子どもがリラックスする活動

○高橋 眞琴¹ 中村 友香² 高橋 真優³ 篠原 眞紀子⁴
(鳴門教育大学大学院学校教育研究科¹, 兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科²,
大阪教育大学特別支援教育専攻³, 立命館大学生存学研究所⁴)
KEY WORDS: 知的障害, リラックス, 保護者

(目的)

文部科学省（2020）によると「障害者の生涯学習を推進する人材の育成・確保の必要が指摘され、国の役割として、障害者の学びの場づくりを担う人材育成に関する方策の検討や研究成果等の発信」が示唆されている。普段の生活や地域の中で障害のある子どもの生活を豊かにしていく取り組みが求められよう。2020 年初頭より、新型コロナウイルス感染症対策の関係で、障害のある子どもたちも外出自粛等となる場合も増加し、普段の生活を送る上で、リラックスする活動も必要であると考えられる。本研究においては、保護者からみた知的障害のある子どもがリラックスする活動について検討することで、今後の知的障害のある子どもが普段の生活を送る上の知見を得ることを目的とする。

(方法)

2020 年 2 月に、インターネット調査会社に、知的障害のある子どもの保護者を対象とした支援に関連する調査を依頼した。本研究では、目的に沿って、質問項目の 1 つである「知的障害のあるお子様が普段の生活で、リラックスする活動はなんですか。ご自由にお書きください※リラックスする活動がない／わからない場合、お手数ですが回答欄に『特になし』『わからない』などお書きください。」という項目を取り上げる。インターネット調査会社は、登録しているモニターの中から、10000 サンプル以内のスクリーニング調査を行い、知的障害がある子どもがいると回答したモニター 100 名が調査に参加した。得られた自由記述について、発表者ら 4 名（知的障害に関する研究歴がある研究者及び特別支援教育を専門とする大学院生、学部生）で、それぞれがカテゴリーを付した。内容が類似するものは統合、意見が分かれた際には、内容を再検討した。尚、インターネット調査会社とモニター間の個人情報保護規定により、「アンケート内容で知り得た内容については手段を問わず第三者に伝達する行為を禁止する」「回答内容で回答者の特定がされることはないこと」「回答内容については、インターネット調査会社の個人情報保護規定に基づいて取り扱われる」「同意して協力が可能な場合のみ調査に参加すること」の旨が調査画面に明記されている。

(結果)

発表者ら 4 名で、知的障害がある子どもの保護者 100 名の自由記述内容を検討の上、カテゴリーを付した結果、以下の 23 カテゴリー及び内容が得られた。尚、カテゴリーは斜体、() の数字は、出現回数、内容は抜粋した記述例である。

① **動画** (19) 好きなミュージカル映画、遊園地、アニメーション、ミステリー番組、学習支援などの視聴など。② **特になし** (15) 設問内容に沿って、「リラックスする活動がない」「わからない」場合に記載されたものである。③ **音楽** (14) 音楽聴取、ピアノ、ギターなどの楽器演奏、カラオケなど。④ **テレビ** (12) 好きなテレビ番組を観ているときなど。⑤ **ゲーム** (10) ゲーム機、テレビゲームなど。⑥ **外出** (10) 娯楽施設への外出、ドライブ、散歩、サイクリングなど。⑦ **遊具** (9) プラレール、バランスボール、ぬい

ぐるみ、おもちゃ、人形、滑り台など。⑧ **好きな感覚** (8) 家の中を歩き回る、独り言をいう、ビニール袋を巻く感触、スライム、気に入ったものを常時携帯する、水遊び、家の中で大きな声を出すなど。⑨ **人との関わり** (7) 保護者、家族、ヘルパー、学校の友人など、障害に理解がある人との関わりなど。⑩ **やりたいことをやる** (6) その時に本人がしたいことを集中してする、気がすむまでするなど。⑪ **指先を使った活動** (6) 文字を書く、タブレット端末でのパズル、工作、食用玩具の組み立てなど。⑫ **スポーツ** (4) ランニング、野球観戦、サッカー観戦など。⑬ **読書** (4)、⑭ **乗り物** (4) 電車、飛行機をみる、自転車にのるなど。⑮ **絵を描く** (4) ⑯ **特定の場所** (3) 狭い場所など特定の場所などで落ち着く。⑰ **食事** (3) 外食やデザートなど。⑱ **ダンス** (3) ダンスを観る。ダンスをする。⑲ **温泉** (2) 温浴施設、温泉。⑳ **買い物** (2) 本人が得たお金でお菓子、DVD などの買い物。㉑ **自分で落ち着かせている** (2) 自分で静かに過ごすことで、落ち着く。㉒ **一人で過ごす** (2) ㉓ **睡眠** (1) であった。

(考察)

①メディア機器を活用した能動的活動：回答の多かった動画、音楽、テレビ、ゲームはいずれもメディア機器によるもので、これらを介したリラクセーションは、社会的距離を要する状況下において活用でき、普段の生活に取り入れやすいものであろう。動画と回答した例では、ダンス、歌唱、スポーツなどの能動的活動もあげられており、身体の運動機能、手先の微細運動などの低下も懸念される今日の状況下では、身体全体を動かすこともリラクセーションや心理的安定に資すると予測される。

②好きな感覚の活用；手先の微細運動をリラックスする活動とする回答例があった。視覚的な活動を身体の粗大運動と指先の微細運動に関連づけることは感覚統合の面からも重要であろう。「やりたいことをやる」「好きな感覚」などの複数回答は、児童の自発性を動機づけることでリラックスが導かれることを明らかにしている。

③家族へのアウトリーチの必要性：「特になし」の回答が複数存在することは、知的障害のある子どもにストレスによる混乱があった場合、解消方法を把握していないとも予測される。今回得られた活動例の提案など、家族へのアウトリーチも求められる。

学校や専門機関と連携することによってさらに一人ひとりに合った活動も可能となる。子どもや保護者が安定した生活を送るためにも多様な活動の展開や ICT 等の活用で、人とつながる機会の保障も望まれる。

(文献) 文部科学省(2021)「障害者の生涯学習の推進を担う人材育成の在り方検討会の設置について」

https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shougai/043/gaiyou/1422206_00001.htm (閲覧日：2021.5.13)

(備考) 本研究の一部は、JSPS 科研費 18K02442、19K02614 の助成を受けている。

(TAKAHASHI Makoto, NAKAMURA Yuka, TAKAHASHI Mayu, SHINOHARA Makiko)